さらに充実の「第二回台湾李登輝学校研修団」

なんと李登輝校長は四回も登場！

本会事務局次長　片木裕一

「阿輝伯」を熱唱する参加者

当初、二月二十六日に開催予定だった第二回台湾李登輝学校研修団（山口政治団長、三上伊三男副団長）は、都合により二週間ずれ三月十二日からの開催となりました。第一回も発表後に日程が変更されたこともあり「また？」という心配も何のその、二月十日締切の一週間前に定員となり、最終的には四十八人の参加となりました。

参加者は、北は岩手県花巻から南は九州福岡、さらには台湾やシンガポールからもあり、今回の研修団が「世界的規模」なった感があります。

【初日・三月十二日】

日本各地から台北・桃園空港へ向かうのですが、どうも天候が悪いらしくどの飛行機も大揺れ、現在の台湾を暗示しているようです。そのため到着の遅れも発生しました。

それでも参加者の大半は台湾神学院での李登輝先生の名誉神学博士号授与式会場に三時過ぎに到着。式典は二時から始まっていたのですが、授与には何とか間に合いました。ここで李登輝先生は授与に対する感想を述べられたのですが、キーワードは「私は私ではない私」。やはり偉大な哲人は我々の想像をはるかに超えているのです。

ところで、この日の台北は雨、かつ気温は八度とか。神学院は山の中なので、さらに寒い！　五時前に授与式は終了、研修会場の渇望学習センターへ向かうのですが、このバスも寒い！台湾のバスには暖房はなく、二号車では、窓ガラスの湿気を取るためになんとクーラーを入れていたのです。

七時前に渇望学習センターに到着。食事のあとオリエンテーションです。黄昆輝教頭よりご挨拶と、群策会の「三つの大きな仕事」について説明いただきましたが、三つの仕事とは、一、台湾と中国の政策の研究、二、李登輝学校で台湾人意識の高い人材を輩出する、三、台湾の歴史や文化・経済に関する書籍を刊行することです。続いて荘孟学・教育処処長からスタッフの紹介があり、最後に参加者の自己紹介。

【二日目・三月十三日】

さて、始業式です。全員八時半に入室ですが、入り口で金属探知機チェックや持ち物検査があり、「写真はＯＫだが、席を立たないように」とのこと、李登輝先生がいかに重要な存在かがよくわかります。

さて、李登輝校長の登場です！　会

場は割れんばかりの拍手と台湾マスコミのフラッシュの嵐。そして、簡単なご挨拶の後、講義に入ります。講義では、李登輝校長がいきなりスタッフに「何か書くものはないのか」と注文、ボードが用意されると「則私去天、則天去私」と書かれ、本題に入りました（講義の詳細内容は次号にて）。

恒例のティー・ブレイクは前回同様飲茶（やむちゃ）もあり、これから一日五食の生活になります。

次の講義は「李登輝前総統の『台湾の民主化』について」（国史館館長・張炎憲先生）です。前回は李登輝先生の若き日の写真などを交えてお話しされましたが、今回はミッチリ九十分、近代史を語っていただきました。特に民主化の担い手を「二二八世代」「七十年世代」「八十年世代」に分類して分かりやすく解説いただきました。

これで午前の講義は終了ですが、ここで朗報です。なんと李登輝校長自ら「もっとお話ししたい」とのことで、急遽、明日の夕方、特別講義が設定されることになりました。普通の学校の補習は御免ですが、こんな補習だったら大歓迎です！

昼食の後は「台湾の歴史」（中央研究院台湾史研究所副所長・陳慈玉先生）です。前回はいわゆる「歴史全般」でしたが、今回は経済やインフラの面から見た歴史で、特に一九四七年の国民党資源委員会の四つの原則の説明により、当時の中華民国が台湾を仮の住いとしか考えていなかったことがよく分かります。

ティー・ブレイクの後、「台湾の文化・文学」（小説家・鄭清文先生）です。

事前に配布された「教材」に百以上のポイントを列記、必要に応じて補足されたり、事例を紹介されます。優しい口調ながら、中国の文学に対しては「単なる文章の学問、文字遊びに過ぎず、学ぶことはほとんどない」と言い切られたのには驚かされました。

さて、夕食の後は、「台湾の制憲運動」（淡江大学大学院教授・許慶雄先生）です。許先生は独特の理論を展開され

黄昆輝教頭、3月12日

莊孟学処長と研修スタッフ、3月12日

張炎憲先生、3月13日

陳慈玉先生、3月13日

るので注目なのですが、今回も「香港のようになるのが嫌なら台湾として独立しなければならない」「いくら国としての要件が揃っていても、自ら『我々は台湾だ』と言わない限り誰も認めない」などなど今回も健在です。さらには「台北を首都として、各国の大使館があるということは、実質上、台湾は中華民国の領土＝中国の旧政府と言わざるを得ない」と、ややもすれば避けたいこともはっきりと発言されます。

朝から講義の連続で、かつ食後なので瞼に襲ってくるものもあったはずですが、大変熱気にみちた講義でした。

これにて二日目は終了です。ところで今回も正面口わき（屋外）の「渇望煙草センター」は健在？　ですが、なんせ外は冷たい雨に風、喫煙者は本当に冷遇されることとなりました。

【三日目・三月十四日】

この日の最初の講義は「台湾と日本の安全保障」（台湾独立建国聯盟主席・黄昭堂先生）です。いつも黄昭堂先生は軽妙な語り口で、かつ適当に脱線されるので何時間聞いていても飽きさせません。

ところが、今回はいきなり一九五一年の安保条約から入り、「極東」の定義のいきさつです。さらに台湾の位置的重要性、潜水艦の脅威、そして核兵器の存在価値と続きます。多少の脱線はあるものの、これだけ中身の詰まった講義はそうそう聞けません。

後半、「原宿でタケノコ族を見たとき『ああ、これで日本もおしまいだ』と思ったが、ほどなく台湾でも似たような連中が現れた。『台湾もダメか』と思ったが、流行は伝播する。きっかけは何であれ日本と台湾が繋がり、交流が深まるのであれば、二十年後は期待が持てる」とのこと、我々研修団は何か重たいものを背負った気がします。

質疑応答はとても時間に納まりません。従って参加者全員にはまわりません。残念！

午後の最初の講義は「台湾の主体性の追及」（中央研究院・林明徳先生）です。いままでに習った台湾の民主化や歴史と随所で話がつながり、復習になります。最後にカイロ宣言やポツダム宣言にも触れられ、台湾ではカイロ宣言をベースに「台湾は中華民国の領土」と言っているが、正規の国際法はサンフランシスコ条約であり、日本は台湾を放棄しただけでその帰属は未定である、従って国際舞台では中華民国は国家ではない、と明言されました。

そして、最後の講義は李登輝校長再登場です。題して「新時代の台湾人」。李登輝先生は「かつて私は『新台湾人』を提唱したが、選挙で矮小化されてしまった」と述べ、「だから台湾は中国とは別の国という認識を持ち、台湾へいつ来たかという到着順にこだわらない、台湾人意識を持った『新時代の台湾人』が求められるのだ」と熱く熱く語られ、その後の質疑応答でも多様な質問に丁寧にお答えいただきました。

結果、終了時刻は予定より大幅に遅れ、龍譚（りゅうたん）のレストランでの晩餐はキャンセル、渇望学習センター内のレストランでの食事となりましたが、誰も文句はなし、当然ですが……。

夕食の後、一行は二台のバスに分乗して台北へ向かい、八時過ぎにホテルへ到着。この日はこれにて終了。

【四日目・三月十五日】

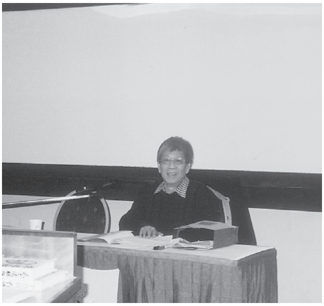
本日は野外視察研修です。前日までの冷たい雨はあがり、気温も十六度まで上昇、絶好の野外研修日和となりました。最初は総統府で、今日は館内に陳総統がおられるせいかチェックが厳しい。それでも見学は短か目に切り上げます。というのは、次の見学地の二二八紀念館へ行く途中、立法院前で台湾団結聯盟の議員たちが中国の反国家分裂法に抗議する座り込みデモ（二十四時間のハンスト）をやっているので、急遽ここも見学（というよりは、完全に応援団）することになったためです。「ハンストデモ」なので比較的静かでしたが、我々が入ると台湾のマスコミもカメラを向けるので、台連のメンバーも気合が入ったようです。

次は二二八紀念館です。ここで日本語の堪能なボランティアの方々に前回同様、丁寧かつ感情を込めた解説をしていただきました。特に中国国民党の台湾人に対する弾圧・虐殺がよく理解でき「台湾を絶対中国に渡してはいけない」と一同強く感じた次第です。

昼食は今回も小籠包（しょうろんぽう）で有名な鼎泰豊ですが、何とここに台湾のテレビ局が乱入、突撃インタビューすべく「追っかけ」をやっていたそうです。それも親ブルー派！　柚原事務局長が「我々は台湾を断固支持する」と一喝したものの政治家やタレントならいざ知らず、研修生の食事時に直撃インタビューはカンベンしてもらいたい（怒）。

最後は原住民博物館です。これが忠烈祠の斜め前にあるのがなんともいえません。まさに台湾VS中国の構図です。

ここでは原住民の生活、文化などを


鄭清文先生、3月13日

許慶雄先生、3月13日

黄昭堂先生、3月14日

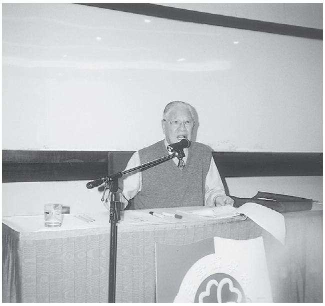
林明徳先生、3月14日

数多く紹介しています。また、台湾原住民のルーツについて、地下の映像館でアニメによる解説がありましたが、かなりお疲れモードの上に、暗い室内に、加えてやさしいナレーションとくると、瞼に襲ってくるものに抗しきれなかった人もいたようで。

野外研修はこれにて終了、バスでホテルへ五時過ぎ到着、これにて解散。で、いつものことながら、参加者は夜の街へ語学研修に……。

【五日目・三月十六日】

最終日・修業式ですが、今回は淡水の群策会のオフィスへは行きません、移動時間の節約です。会場には李登輝校長以下、黄昭堂先生、老台北・蔡焜燦さん……申し訳ありません！　紙面の都合上、以下省略。



李登輝校長、3月14日

反国家分裂法抗議デモ、3月15日

まず修業挨拶は李登輝校長、ここでも「私は私ではない私」「新時代の台湾人」を強調されました。

続いて黄昭堂先生。先生はいつも記憶に残ることを発言されますが、今回は「皆さんは尖閣列島の件で、日本が台湾を訴えるよう働きかけてほしい。そうすれば被告の台湾は国かどうか、国際舞台で議論になる」とのこと。台湾を国際舞台に引き上げるためには手段を問わない、との意思表示です。我々も何かアイデアを考えねば。

続いて修業証書の授与式で、前回同様、李登輝校長は四十八人全員に手渡されました。その後、今回の特別企画・奇美楽団によるコーラス会です。また「仰げば尊し」はすでに恒例になっていて、今回は三番までフルコーラスでした。

最後は李登輝校長を交えての昼食会です。豪華なメンバー、豪華な料理を堪能し、これをもって名残惜しくも第二回研修団は終了となりました。

＊

台湾では李登輝学校の卒業生はすでに六百人を超え、今後いろいろな形で「新時代の台湾人」として頭角を現してくることになるでしょう。

一方、我々日本人側（一部台湾人もいますが）は次回十月二十九日から「第三回研修団」を計画していますが、ここまで含めると卒業生は百五十人となります。この人数は半端ではありません。台湾卒業生と我々は、手を携えて「日台共栄」を推し進めていきたいと思います。